

## まえがき

教育の歴史はそのままメディアの歴史でした。古くは粘土板、竹簡、パピルス、羊皮紙。そしてやがて紙が発明されてからは紙と筆が世界に普及してゆきました。とりわけ、印刷という文字の大量生産方式が登場してからは、識字率もたかくなり、それはやがて教科書という名の教育メディアになりました。日本では「庭訓往来」によって代表されるような「往来物」が近代の教育制度が成立する以前から教育メディアとしてひろくつかわれていたことなども日本の教育史をかんがえるにあたって重要な事実でありました。中国からはじまった算盤なども計算用の教育メディアとして位置づけてもいいでしょう。

明治以降の歴史のなかでは国定教科書のような印刷メディアにくわえて石板、黒板などが発明されて学生・生徒の自習メディアになったり、教室での教育メディアとして使用されるようになりました。こうしたメディアの普及こそが教育の効率化に貢献したことはいうまでもありません。

これら伝統的メディアにくわえて、過去半世紀ほどのあいだに、教室授業では映画、ラジオ、テレビなどが補助的メディアとして利用されたり、あるいはOHPだのスライドだのが有効なメディアとして使用されたりするようになってきました。

さらに近年ではビデオ・テープのような教材開発もすすんできましたし、コンピューターによる教育も開始されました。また、コンピューターを通信にむすびつけた双方向型のメディア利用も本格化してきたようです。それらあたらしいメディアを駆使するための「メディア・リテラシー」などということばが登場してきたこともご承知のとおりです。

ところが、初等・中等教育でのこうした教育メディアの進化とそれにたいする教師、生徒の適応力にくらべると、高等教育機関でのあたらしいメディアの教育利用はかならずしも満足なものとはいえないようにおもいます。学会などでのOHPやスライドの使用はふつうになってきましたが、大学の教室のなかでのメディア利用は総体的にみてあまり活発ではありません。

今回、放送教育開発センターが主催したこのシンポジウムはこのような大学の実態をみつめながら、おたがいにメディアを大学でどう使用するかを学習するためのものでした。わたくしたちが予想していた以上のおおくの参加者をお迎えできたのは、おそらく以上のような問題意識が全国の大学の先生がたのなかに芽ばえてきたことの証拠なのでしょう。たいへんありがたく、また力づけれる経験でした。発表者、参加者のみなさまに、あらためてお礼もうしあげます。

この成果をふまえて平成七年秋にはおなじ主題で国際研究集会を開催します。こうした一連の討論が日本の大学の将来に貢献できれば、これにまさるよろこびはありません。

最後になりましたが、このシンポジウム開催にあたって実行委員長をつとめられた永岡慶三教授、編集作業にあたられた伊藤秀子助教授、そしておおくの教職員に感謝いたします。

放送教育開発センター所長 加藤 秀俊